



Title	アブドゥルラザク・グルナのノーベル文学賞受賞に寄せて : フェイスブックにおけるタンザニア人の反応を中心に
Author(s)	小野田, 風子
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2022, 33, p. 85-100
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87076
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【研究ノート】

アブドゥルラザク・グルナのノーベル文学賞受賞に寄せて
— フェイスブックにおけるタンザニア人の反応を中心に —

小野田 風子

0. はじめに

2021年10月7日、タンザニア出身の英語作家アブドゥルラザク・グルナのノーベル文学賞の受賞が決まった。日本の各メディアはグルナの受賞をまったく予期していなかったようで、タンザニアの文学を研究しているというインターネット上の情報を頼りに、筆者にも取材の依頼が舞い込んだ。筆者の研究対象はタンザニアのスワヒリ語による文学である。英語で書く作家であるグルナは専門外ではあるが、その事実を伝えた上でいくつかの依頼を受けた。ただ、急な対応ゆえに、不十分かつ偏った情報を提供してしまったこともあった。本稿執筆の動機は、このニュースに関してあらためて適切に記録する必要性を感じたことである。

とはいえ、グルナの作品や作家性について付け焼き刃の知識で生半可な分析を行うことにあまり意義はないだろう。そういった議論は専門家にゆだね、本稿ではグルナの受賞をめぐるタンザニア側の背景や動きの方に焦点を当てる。すなわち、グルナという作家が誕生した背景である、①タンザニアの政治的混乱の確認と、②グルナの受賞に対するタンザニア人の反応の分析である。グルナはあるインタビューにおいて、タンザニアとの精神的繋がりを以下のように打ち明けている。「私は今でもあの場所と繋がっている……私はあの場所出身なのです。心の中では私はあの場所に住んでいるのです」(Aljazeera)。グルナが今も思慕するタンザニア側の事象や反応について確認し、記録しておくことが、スワヒリ語文学を専門とする筆者の役回りであろう。

今回タンザニア人の反応を知るために活用したのがフェイスブック (Facebook) である。現地人の意見の収集のためにソーシャルメディアを用いることには、現地調査にはない利点がある。まず、このような急な出来事に際し、即座に現地赶赴することが困難であっても、短期間の現地調査で集め得る以上の人数分の意見に触れることができる点である。今回閲覧したコメント数は、合計 707 件に上った。さらに重要な利点として、現地人同士が外国人の目を意識することなく自発的に交わしている意見をのぞき見ることができる点がある。インタビュー調査では質問者の存在を否が応でも意識させてしま

うが、ソーシャルメディア上では現地人同士の気負わないおしゃべりと比較的近い場が成立していると考えられる。

問題点もある。利用者の匿名性と、それゆえに書き込まれる意見が極端になりやすい点に加え、タンザニアのようなインターネットの普及率がいまだ低い国では、利用者の世代と性別、経済状況に偏りがあると考えられる。しかしながら、ソーシャルメディアの映し出す光景と現実とを同一視すべきではないと認識した上で、現実の一側面をうかがい知る手段としてソーシャルメディアを活用することには、一定の意義があるだろう。

本稿で扱うコメントを、タンザニア人同士の内輪のおしゃべりにできるだけ近づけるため、本稿ではスワヒリ語のコメントのみを扱っている。さらに、コメントの書き手に関して、特に断りのない場合は、フェイスブックの自己紹介欄や投稿からタンザニア出身であることが推察できる人物を選んでいる。

1章では、グルナの出国のきっかけとなり、受賞に対するタンザニア人の反応にある一定の影響を及ぼしてもいるザンジバル革命の経緯をたどる。2章ではフェイスブック上のいくつかの投稿とそれへのコメントから、グルナの受賞に対するタンザニア人の反応を分析する。3章ではグルナの受賞が浮かび上がらせるタンザニアの諸問題について考察する。以上により本稿は、ノーベル文学賞の受賞というビッグイベントをめぐる歴史的背景と現地の反応の一部を記録することを企図している。

1. ザンジバル革命

グルナの複数の作品は、自身が経験したザンジバル革命を下敷きにしているとされる。またこの革命は、受賞に対する一部のタンザニア人の反応にも作用している。本章では、この革命の経緯を、革命についてのグルナの記述も参考にしつつたどりたい。

1.1. 前史

「ザンジバル」とはウングジャ島とペンバ島、その周辺の複数の小さな島々から成る諸島の名称であり、時に、その中のウングジャ島のみを指す。本稿では諸島全体を指す語として用いる。

この地域を含む東アフリカの海岸部は紀元前から環インド洋貿易の拠点として栄え、古くからアラブ人交易商人の出入りがあった。7世紀頃から、アラブやペルシャからこの地域へと人々が移住を始め、現地人と混雑した。アラブ人は現地にアラビア文字やイ

スラム教を伝え、スワヒリ語にアラビア語からの借用語を多くもたらした。

16 世紀から東アフリカに侵略してきたポルトガルを駆逐するため、現地人がオマーンの力を借りたことから、18 世紀になるとザンジバルはオマーンの支配を受けるようになる。19 世紀、オマーンのスルタン、サイイド・サイードは、首都をマスカットからウングジャ島のストーンタウンに遷都する。当時の領土は現在のソマリア南部からモザンビーク北部の海岸沿い一帯に及んだ。しかしサイイド・サイードの後継者争いにつけ込んだイギリスによってオマーンの統治は弱体化される。さらに主要な収入源であった奴隷貿易をイギリスによって禁止されたことが追い打ちをかけ、親英派のスルタンによってザンジバルはイギリスの保護領となる。反英派のスルタンの即位をきっかけに 1896 年に起こったイギリス・ザンジバル戦争を経て、イギリスの傀儡政権のスルタンによる統治が続いた。

1961 年、大陸部のタンガニーカがイギリスから独立した流れを受け、ザンジバルも 1963 年にイギリスの保護領を脱し、1964 年にスルタン・ジャムシドが統治する立憲君主制の国家となった。この時のザンジバルの人口構成をみると、アフリカ系 25 万人、アラブ系¹⁾5 万人、アジア系²⁾2 万人となっている。アラブ系住民は肥沃な土地の 80 パーセントを所有し、管理職を独占していた一方、アジア系住民は公務員職と商業面を押さえており、一般的にアフリカ系住民よりも裕福であった。アフリカ系住民は、ザンジバルの最初期の住民と、内陸部から出稼ぎに来た人々に分けられていた。最初期の住民とは、内陸部のアフリカ人と 7 世紀頃に移り住んだアラブ人貿易商人との混淆の結果生じた集団で、現イランのシーラーズを故地と考え、「シラジ」(Shirazi) と自称していた。ただ、アラブ、シラジ、それ以外のアフリカ系の区別は曖昧で、その範疇は多分に自己申告に基づいていた (Shao 1992, Petterson 2002, Brents & Mshigeni 2004)。

イギリスからの脱植民地化の一環で、1961 年から民主的な新政権の設立のための選挙が行われていた。ウングジャ島のアフリカ系住民は、アラブ系とアジア系への怒りを糧に団結し、アフロ・シラジ党 (ASP: Afro-Shirazi Party) を結成して、アラブ系政党のザンジバル国民党 (ZNP: Zanzibar Nationalist Party) に対抗した。しかしペンバ島のシラジ人は内陸部出身のアフリカ人との関係を嫌い、ASP への参加を拒み、ザンジバル・ペンバ人民党 (ZPPP: Zanzibar and Pemba People's Party) を結成した。ASP は得票数では最

¹⁾ 主にオマーン系のアラブ人。

²⁾ 主にインド亜大陸出身者。

多であったが、選挙区が ASP に不利になるように区割りされていたために議席の伸びが限られた。ZNP と ZPPP は連立政権を樹立し、1963 年の独立後もアラブ系による支配が続く結果となった (Pettersson 2002)。「アラブ人にとってだけの独立」(Uhuru wa Uarabu tu) だったのである (Clayton 1981: 49)。

ZNP の大臣から成る新政権は、教育や医療、福祉の予算の大幅カットを行ったが、この政策で最も被害を受けたのは貧しいアフリカ系住民だった。また、公務員職においてアラブ系を優遇し、内陸部出身のアフリカ人警察官を全員解雇して、政党の支持者に置き換えた。敵対する政党の弾圧や報道機関の検閲も顕著で、ZNP に反発した急進的な共產主義者のアラブ人たちが 1963 年に結成した政党、ウンマ党 (Umma Party) を禁止した (Pettersson 2002, Speller 2007)。

また外交政策ではエジプトなどのアラブ世界との関係性を重視し、ASP が望んだアフリカ本土との関係に無関心であった。さらにアフリカ系住民に対しての差別意識を隠そうとしなかった。例えば当時の財務大臣は ASP の党首アベイド・カルメを侮蔑的に「ボートマン」と呼び、アフリカ人は精神的能力が低いため奴隷にしか向かないと発言した (Pettersson 2002: 41)。

1.2. 革命

1963 年、ウガンダ人のジョン・オケロがレンガ職人としてザンジバルに渡る。彼は労働組合の役員や ASP の活動家として各地を訪れ、革命の思想や計画について説いて回るようになる (Pettersson 2002)。1964 年 1 月、オケロは解雇されたばかりの元警察官を含む約 800 人のアフリカ系住民を組織し、警察署、武器庫、ラジオ局を攻撃した。彼は奪取したラジオ局で「帝国主義者」を打倒するために立ち上がり、アラブ人男性を殺害するよう呼び掛けた。武装集団は最初の攻撃から 6 時間でストーンタウンの主要な建物を制圧し、スルタンは首相と共に島を脱出した。武器庫から奪った武器が地方に送られたことで暴力行為が拡大し、ザンジバル全土で数百から数万人とも言われるアラブ系やアジア系住民が殺害され、オマーンなどの国外に逃亡した人々も多かった (Pettersson 2002, Speller 2007)。

ザンジバルの公式の記録は、革命は ASP の党首であるアベイド・カルメによって計画され、指導されたとしている。しかし実際には、カルメは革命について詳しく知られてはおらず、革命時にはオケロによって身の安全のため大陸側に移送されていた

(Speller 2007)。ラジオを通してウガンダ訛りのスワヒリ語で暴力を煽り、敬虔なキリスト教徒として聖書の教えを口にするオケロは、95%以上がムスリムであるザンジバルでは異質な存在であり、大多数の穏健な ASP 支持者たちも、オケロたちの暴力行為に恐れをなしていた (Pettersson 2002, Speller 2007)。

1.3. その後

革命後、大半の穏健なザンジバル人の支持を集めたのはオケロではなく ASP とその党首のカルメだった。ASP はアラブ系左派のウンマ党と暫定政府としての革命評議会を組織し、国名を「ザンジバル・ペンバ人民共和国」と改称して、カルメを大統領に据えた。オケロの気性の荒さや革命後も続くオケロ支持者たちの暴走に危機感を抱いた新政府は、オケロを国外追放し、支持者たちの武装解除を急いだ (Speller 2007)。

4 月、カルメはタンガニーカのニエレレ大統領と非公開の会合を行い、タンガニーカとの合邦と、新しい国タンザニアの誕生を発表した。合邦の背景には、穏健な社会主義者のカルメが急進的なウンマ党をけん制しようとしたとも、アフリカに第二のキューバが誕生することを懸念したイギリスと、タンガニーカのニエレレ双方の意向があったとも推察されている (Speller 2007)。

合邦後もザンジバルは自治が認められ、大統領のカルメの下、ASP が一党制を敷いてザンジバルの内政に関する権限を保った。ASP はアラブ系やアジア系が独占していた公務員職や土地をアフリカ系住民に分配し、医療の無償化や教育機会の均等化を進めた。革命は「アラブ人の抑圧者からの解放」として正当化され、革命の日は祝日に制定された上に、アラブ系住民はあらゆる分野において冷遇された (Shao 1992, Burgess 2009, Hettiger 2010)。1967 年にタンザニアの社会主義化が決定されると、「搾取への抵抗」が掲げられる中、搾取者としてのアラブ人というイメージが上塗りされることになった (Clayton 1981)。革命後、タンザニアでは反アラブ的な詩がラジオや新聞、本や歌などで普通に見られるようになったという (Mulokozi 1975)。

ASP は 1977 年にタンガニーカを一党支配していたタンガニーカ・アフリカ人民族同盟 (Tanganyika African National Union: TANU) と合併、誕生した革命党 (CCM) は 1992 年までタンザニアで唯一の政党であった。1992 年に複数政党制が導入されると、ザンジバルのアラブ系に対する CCM による差別に不満を抱く層によって、市民統一戦線 (CUF) が結党される。CUF はザンジバル革命前に政権を担っていた ZNP の後身とい

う性格を有していた (Brents & Mshigeni 2004)。

以降、ザンジバルでは選挙ごとに CCM と CUF が対立し、不正選挙の主張や CUF の支持者による暴動が繰り返されるようになる。2000 年代前後から東アフリカでイスラム過激派による複数のテロが発生し、容疑者がザンジバル出身者であったことが判明する。ザンジバル内でも観光客向けのリゾートや教会、政党事務所を標的とした爆破や放火が発生するようになった。こういった混乱の度に CCM は CUF の関与を疑って CUF とイスラム過激派を紐づけようとし、一方 CUF は、差別と抑圧を正当化するためのレッテル張りであるとして反発している (Brents & Mshigeni 2004)。

近年、ザンジバル内の高い失業率や政治家の汚職、人権侵害により CCM への不満が充満する中、自分の出自をアラブと結びつけ、イスラム原理主義に引き付けられる若者が増加しているという (Brents & Mshigeni 2004)。ザンジバル革命が搾取からの解放として正当化されることで押し込められてきた不満が、革命後の抑圧により増幅され、様々な軋轢を生んでいる。革命は現在に至るまで尾を引いているのである。

1.4. グルナの体験

アラブ系上流階級出身のグルナが兄と共にイギリスへと移住したのは、タンザニアの社会主義化が宣言された 1967 年だった。彼は自身が身近に体験した革命について 2001 年に以下のように書いている。「何千人もが虐殺され、コミュニティ全体が追放され、何百人もが投獄された。その後の混乱と迫害の中で、執念深い恐怖が私たちの生活を支配した。私は、学校を卒業した翌年の 18 歳のときに脱出した。捕まって行方不明になった人もいたが、ほとんどは同じように無事逃げ出せた」 (Gurnah 2001)。

グルナのノーベル文学賞受賞は、各種メディアにおいて「難民出身作家の受賞」という側面が強調されている。しかしながら彼は「自分自身を亡命者や難民と表現したことはなかった」と述べる。彼は、入国の際に「フェリーの側面にしがみついたり、列車の下に潜り込んだり」したわけではなく、観光ビザで入国した。そして、「自分の国を恥じていたし、自分たちが犯してきた残虐行為や恐怖を恥じていたので、それを移民局の職員と話し合おうとは思ってもよらなかった」という (Gurnah 2001)。また、ザンジバル革命をアフリカ人とアラブ人の人種的な二項対立でとらえようとする言説にも異を唱えており、アラブ系政党のウンマ党が革命を支持する側であったことを挙げ、現実の複雑さを指摘している (Steiner 2013)。その複雑さこそが彼が難民という自己認識を退け

る所以なのかもしれない。

2. フェイスブックからみる受賞への反応

本章では、受賞に関連し、フェイスブックでシェアされたスワヒリ語の投稿と、それらの閲覧者によって書き込まれたコメントを分析し、いくつかの傾向を見出す。

2.1. 参照した投稿

まず、今回参照した投稿と投稿日、その投稿に寄せられたコメント数（2021年12月2日最終閲覧）を、投稿日順に以下に記す。参照した投稿には、メディアのアカウントによってオンラインのニュースがフェイスブック上でシェアされたものが含まれる。受賞の事実のみを伝えるニュースが複数のメディアによってシェアされる中、ここでは比較的コメント数が多いものを選んだ。

- ① U.S. Embassy Tanzania、投稿日 10 月 7 日、コメント数 88 件
- ② Joseph Mbele 氏、投稿日 10 月 7 日、コメント数 17 件
- ③ Mwananchi、投稿日 10 月 8 日、コメント数 65 件
- ④ DW Kiswahili、投稿日 10 月 8 日、コメント数 143 件
- ⑤ BBC Swahili、投稿日 10 月 15 日、コメント数 62 件
- ⑥ BBC Swahili、投稿日 11 月 8 日、コメント数 178 件
- ⑦ James Gayo 氏、投稿日 11 月 11 日、コメント数 153 件

①は在タンザニア米国大使館のアカウントで、祝意を伝える投稿である。②は北米の大学で英文学を教えるタンザニア人のアカウントで、スワヒリ語文学について投稿することが多く、文学に関心のある人々が閲覧していると考えられるため参照した。③はタンザニア大手メディアのアカウントで、グルナの経歴や受賞へのコメントを紹介するニュースをシェアしたものである。④はドイツ国営の国際放送事業体ドイチェ・ヴェレのスワヒリ語放送のアカウントで、タンザニア人アナウンサーがザンジバルに赴き人々にインタビューをしたりグルナの通った学校に訪問したりする映像のシェアである。⑤と⑥は BBC スワヒリ語放送のアカウントで、タンザニア人記者が受賞を独自の視点から論じた論評記事のシェアである。⑦はタンザニアの代表的な風刺漫画家のアカウントで

あり、受賞への意見を綴った投稿である。普段からタンザニアの社会情勢を風刺する投稿が目立つため参照した。

このうち、受賞への祝福にとどまらず、さらに踏み込んだ考察や見解が示されている②、⑤、⑥、⑦の投稿内容を紹介したい。②で **Mbele** 氏は、タンザニアの主要メディアに先んじていち早くこのニュースを伝えた。そのため、賞の重要性について説明した後、彼は以下のようにタンザニアメディアの反応の遅さを嘆いている。「今、大惨事が起きている。無知が蔓延し、読書習慣が欠如しているため、政府から市井の人々に至るまで、タンザニア人は誰もこのニュースにしかるべき注意を向けることができていない。誰もこの賞の重要性を理解していない。「木のあるところに大工がいない」という例の理屈が思い出される。国家的な大惨事だ。預言者は世界で認められていても自国では無名なものだが、アブドゥルラザック・グルナもその一人だ」。「木のあるところに大工がいない」(*Kwenye miti hakuna wajenzi*) とは、豊富な資源があるにも関わらず、無知ゆえに利用されていない状況をあてこすることわざである。才能のあるタンザニア人がいたにも関わらず、知られていない現状を残念がる意図であろう。

⑤は **Mohammed AbdulRahman** 氏による論評記事で、「アブドゥルラザク・グルナ：彼の受賞はタンザニアの教育についての議論を呼ぶ」というタイトルがついている。氏は、グルナがタンザニア人と言えるのかという議論が巷を賑わせているが、それよりも、タンザニアにおける読書や執筆の文化の衰退について議論するきっかけとして、この受賞を役立てるべきだと主張する。スワヒリ語使用を核とした国民教育と国民文学の確立に国を挙げて取り組んでいた独立直後に初等教育を受けた氏は、以降タンザニアの教育水準が徐々に低下していると指摘する。教育予算は削減され、教師には低賃金ゆえの無気力が蔓延し、学校の図書室や公立の図書館には十分な本が所蔵されていない。一方で富裕層は私立学校で質の高い教育を受けることができ、インターネットで自由に読書することも可能であるとして、氏は格差のさらなる拡大と固定化を懸念している。

⑥は東アフリカを専門とするフリージャーナリストの **Priya Sippy** 氏による、「ノーベル文学賞を受賞したタンザニア人のアブドゥルラザク・グルナはなぜ故郷であり知られていないのか」というタイトルの論評記事である。ここで氏は、グルナを知っているタンザニア人は非常に少ないというザンジバル人詩人 **Ally Saleh** 氏の言を紹介し、その作品を東アフリカの書店で見つけることが困難である理由を関係者へのインタビューを通して考察している。ザンジバルの政治家 **Ismail Jussa** 氏によると、ザンジバルでは

革命の後、優秀な文学者や教師が国を去り、複数の図書館が閉鎖され、現在でも文学の学位を出す大学が存在しないという。図書館や書店は教育指定図書を置くことにしか関心を持たず、文学作品へのアクセスが困難である点はタンザニアの全国的な問題である。タンザニア大手出版社 Mkuki na Nyota の取締役、Mukuki Bugoya 氏によると、学校で教えられていない作品は需要が少ないため価格が高止まりし、ますます手が届きにくくなるという。Sippy 氏はグルナが母国で無名である理由の一つとして、スワヒリ語ではなく英語で書いていることを挙げる。そしてロンドン大学の講師 Ida Hadjivayanis 氏が彼の作品のスワヒリ語訳に取り組んでいることを紹介し、良質な本を手に取りやすくすることで、読書をめぐるタンザニアの現状を変えることができるという彼女の信念を伝えている。

風刺画家の James Gayo 氏は⑦で、受賞までタンザニア人がグルナについて全く無知であったにも関わらず、タンザニア人作家の受賞を我が事として寿いでいることを、グルナをイエス・キリストになぞらえて以下のように風刺している。

聖書によると、イエスが故郷に戻り偉大なる教えを広めているのを聞いたナザレの長老たちは彼を疑いの目で見ても、「あいつ、あの大工だったやつじゃないの？」と言い交わしたという。イエスがその時すでに世界で有名になっていたことを長老たちが知っていたら、(略) みんな彼とセルフィーを撮りたがっただろうし、どこかのお偉いさんはナザレの通りの一つを「イエス通り」と命名しただろう。ナザレの人々は宗教的な立場の違いは置いておいて、「あのイエスって人、うちの街出身なんだぜ！」と自慢しただろう。³⁾

Gayo 氏の投稿の真意は、表現活動がしばしば規制を受け、言論の自由が必ずしも保証されていないタンザニアの現状への批判である。彼は、今回の受賞はタンザニア人であっても世界的な偉業を成し遂げることができるという証明であり、重要なのは、生ま

³⁾ Maandiko yanasema, Yesu aliporudi kwao na kusikika akizungumza mambo makubwa, wazee wa Nazareti walimtilia shaka . Waliulizana, “Huyu siyo yule seremala?”. Wangejua kuwa raia wao anakwenda kuwa mtu mashuhuri duniani(...) labda wengine wangeomba kupiga naye Selfi na mkuu flani wa mkoa angeipa barabara moja ya Nazareti jina “Jesus Avenue”. Bila kujali tofauti zao kiimani waNazareti wengejinasibu kuwa, Yesu ni mtu wa kutokea kwao!

れではなく才能を見つけ育てる環境であると述べる。政治的・宗教的理由による表現への抑圧を続ける限り、「自国民が海外に移住してそこで輝くまで、自国民の真価に気づかないままだろう」と嘆く。

彼の嘆きの背景にあるのは、国内の規範や道徳観を損なう恐れのある表現を規制することを目的に 1984 年に設立されたタンザニア芸術評議会（Baraza la Sanaa Tanzania: BASATA）の活動が、マグフリ前大統領の就任以降活発化していることと関係していると思われる。特に若者への影響力の強い音楽と映像作品が検閲の対象となることが多く、例えば 2018 年には有名なミュージシャンである Diamond Platnumz の楽曲二曲を含む 13 曲が発禁処分となった。発禁の主な理由は不道徳であること、政府を貶めていること、国民と政府の間に不和を生じさせていることなどである（Chimanda 2018）。自身も表現者である Gayo 氏は、この受賞を単に祝福して終わらせるのではなく、自国出身者が国内ではなく海外で偉大な芸術家として大成した理由について考える機会と捉え、表現の自由を侵犯しかねない検閲が強化されつつある現状に対し、コミカルな表現で懸念を示している。

2.2. 投稿に対するコメント

以上の投稿の閲覧者が書き込んだコメントの内容には、大まかに 4 つの傾向が見られた。祝福、自国の批判、疑念や反感、そして冷笑的態度である。以下より代表的なコメントを引用しながら見ていきたい。

(1) 祝福

受賞の事実のみを伝えるニュースへのコメントには素直な祝福が多かった。タンザニアを世界の人々にアピールする機会として喜ぶものや、同じタンザニア人であることを誇りに思うものが目立つ。「(略) あなたはザンジバルとタンザニアの両方をアピールしてくれた。子育て中の私たち親世代は、グルナで最後にならないように、子どもたちをきちんと教育する責任がある」⁴⁾ (Nicco Madinda 氏)。

⁴⁾ (...) hakika umeitangaza vizuri Zanzibar na Tanzania kwa ujumla, wazazi na walezi tuna jukumu kubwa la kuwasomesha vizuri watoto wetu ili tusiishie kwa Prof Gurnah pekee.

(2) 自国の批判

ノーベル文学賞を受賞するまでグルナがタンザニアで全くの無名であったことを恥じ、自国の読書習慣の欠如を批判する、BBC の論評記事の趣旨と類似のコメントも多く見られた。「タンザニア人はグルナがベテランの作家として世界で活躍していた間ずっと沈黙していた。さらなる成功を収めて初めて、彼がタンザニア人でありザンジバルで育ったと知ったくせに、今回の報道ときたら、どれも世界に見栄を張ろうとするものばかりだ。みずからの努力だけで成功した人のおこぼれに預かろうとするのは、浅ましいからやめよう。他の国々に先を越される前に、偉大な人たちを探してきちんと称えよう。まったく恥ずかしい」⁵⁾ (Jamaica Adamz 氏)。「彼の作品は英語で書かれている。タンザニア人の多くはスワヒリ語で書かれた本さえ読まないんだから、英語は言うまでもない」⁶⁾ (Harvey Gates 氏)。「預言者は故郷では大事にされていないものだ」⁷⁾ (Deokrasis Tarimo 氏)。「我々の大多数は読書家ではない。隠したいものがあれば本の中に置くとい」⁸⁾ (Ramadhani Hangwa 氏)。

(3) 疑念や反感

素直な祝福の声と同じくらい目立ったのが、グルナは本当にタンザニア人といえるのかという疑問である。また、BBC の論評記事や(2)のような、自国民の無知を批判する声に対し、グルナが知られていないのは、イギリスに渡り英語で書いているからであるとして、有名なタンザニアのスワヒリ語作家の名前を挙げて反論する意見も目立った。「我々は本当にこの受賞を誇りに思ってもいいのか？ タンザニア人と言うけれど、彼は本当にタンザニア人なのか、それとも出身はタンザニアだが国籍は違うのか。彼の作品のテーマはタンザニアと関係しているのか？」⁹⁾ (Jefa Adili 氏)。「(彼の名前は) 今日

⁵⁾ Gurnnah, ni muandishi wa muda wa vitabu na anafanya vizuri sna duniani kipindi hicho chote Tz mlikaa kimya baada ya kufanikiwa zaidi ndio mnajua alikuwa Mtz na aliomea znz yote tu nikujikweza duniani. Tusiwe wepesi wa kutembelea nyota za watu waliojifanikisha wenyewe kwa juhudi zao bali tuwe wepesi kutafuta taarifa za watu mashuhuri ili tuwape heshima zao hta kabla nchi nyingine kuwatambua na kuwaheshimu. Ni aibu.

⁶⁾ Kwasababu kazi zake za fasihi ameziandika katika lugha ya Kiingereza na Watanzania wengi hawapendi kusoma vitabu hata kama vimeandikwa kwa Kiswahili achilia mbali Kiingereza.

⁷⁾ Nabii hapewi heshima nyumbani kwake.

⁸⁾ wengi wetu sio wasomaji, ukitaka kuwafichia kitu weka kitabuni.

⁹⁾ Naomba kuelimishwa, Hivi tunapaswa kweli kujivunia ushindi huu!? Tuanze na Utanzania wake je yeye ni Mtanzania au Mtu mwenye asili ya Tanzania lkn uraia wake sio wa Tanzania (iwe kisheria au kimapenzi)?! Tuje kwenye kazi zake maudhui anayoandikia yanauhusiano

初めて聞いた。アダム・シャフィやケジラハビ、シャーバン・ロバート、その他の多くの作家については知っているけれど。彼は間違いなくこの国には住んでいないね」¹⁰⁾ (Tupilike Mwakajumba 氏)。「(略) 同じザンジバル人でも、モハメド・セイフ・ハティブは有名だ (略)」¹¹⁾ (Taha Mohammed Ali 氏)。「タンザニア人が読書嫌いというのは正確ではない。(作家が知られているかどうかは) 人生の現実について作家がどのような立場で書いているかによる。50 年間もヨーロッパに住んでいる作家が、タンザニアの兄弟たちと人生の現実を共有していないことは明らかだ (略)」¹²⁾ (Melchior P. Temba 氏)。「第一に、彼はタンザニアに住んでいないからタンザニア人ではない。世界中の人を知ることなんて不可能だ。彼がタンザニアで執筆していれば、もっと知られていただろう」¹³⁾ (Polycarp Mwakangale 氏)。「個人的には、彼の受賞を喜ぶ気持ちはない。彼は自国に対してどんな貢献をしたというのか。(略) 彼はザンジバルで教職に従事したことがあるとでも? いやしい考え方は捨てよう」¹⁴⁾ (Alexander Mlowe 氏)。

(4) 冷笑的态度

グルナの出国のきっかけとなったザンジバル革命を正当化し、その日を祝い続ける一方、彼が難民の作家として賞を受けたことを棚に上げて無配慮に受賞を喜ぶ国民や国家に対して冷ややかなまなざしを向けるコメントも散見された。「彼を迫害し、逃亡者としての人生を余儀なくさせておいて、どうやったら喜べるというのか」¹⁵⁾ (Jackson Karaba 氏)。次のコメントはケニア人による。「彼が故郷から追い出され、今はもうタンザニア人でもザンジバル人でもなく、革命を機にそこを逃れ、すでに英国籍を持っているという事実に、あなた方はみな触れないようにしている。彼は平和を求めて家族とイギリスに逃げたというのに、受賞するや否やタンザニア人とザンジバル人は彼にしがみつく。

na Tanzania!? Asante.

¹⁰⁾ Ndio namsikia leo ,mimi ninamjua mzee Adamu Shafi, Kezilahabi,Shaban Robert na wengineo wengi bila shaka haishi hapa nchini. (訳文の括弧内は筆者による。)

¹¹⁾ (...) watu wanamjua mohammed s khatibu na ni mzanibar (...)

¹²⁾ Si sahihi kwamba watanzania hawapendi kusoma, inategemea mwandishi anaandika akiwa na mtazamo upi na uhalisia wa maisha. Mwandishi ameishi ulaya miaka 50, ni wazi hana uhalisia wa maisha ya mtu anayeishi kule Ndugu (...) (訳文の括弧内は筆者による。)

¹³⁾ Kwanza haishi Tanzania na sio Mtanzania. Hivi inawezekana kujua kila mtu duniani? Angalau angekuwa anafanya kazi tanzania watu wangemfahamu.

¹⁴⁾ Binafsi Sina pongez kwake kwa kuwa hana mchango wowote kwa taifa lake (...) je katika uprofesa wake aliwahi kufanya nn huko Zanzibar?.Tuache fikra za kiumaskini.

¹⁵⁾ Wanefurahishwa vp wakati walishamkataa na kupelekea kukimbia nchi nakwenda kuishi kama mkimbizi?

受賞しなかったら誰が彼について知っていただろう？ 偽善はやめなさい」¹⁶⁾ (Edison Wanga 氏)。ザンジバルの現大統領がテレビ電話を通じてグルナに祝意を伝える様子を報じた ITV Tanzania の投稿に対しても、「タンザニアの政治家や指導者ときたら…まったく！ とんでもない偽善者たちだ」¹⁷⁾ (Adolph Mtenga 氏) というコメントがつけられていた。中には、タンザニア最大野党の進歩民主党 (CHADEMA) の議員で、マグフリ前大統領の在任中に政権の不正や失策を暴いて活躍し、2017 年に暗殺未遂に遭い一時的に亡命したトゥンドゥ・リッスを、グルナになぞらえるコメントも見られた。「(略)もしかしたらそのうち尊敬すべきトゥンドゥ・リッスの類の人がノーベル平和賞を受賞するかもしれない。それでも我々は彼がタンザニアをアピールしてくれたと言うのだから (略)」¹⁸⁾ (Joseph De Pusingare 氏)。受賞に関して都合の悪い事実を無視し、うわべだけを取り繕う姿勢に、強権的姿勢を強める現在の与党の姿を重ねて風刺したコメントであろう。

3. まとめ

グルナのノーベル文学賞受賞に関するフェイスブック上の投稿とコメントからは、現地人が認識する現代タンザニアの諸問題が浮かび上がった。まず、グルナが国内で無名であったことが恥とみなされ、自国の読書習慣の希薄さが広く問題視されていた。その原因として、独立直後と比べた教育の質の低下と教育格差の広がりを指摘する論考も見られた。タンザニア出身者が国内ではなく西欧諸国で活躍し評価されたことを悔しがる声もあり、自由な表現活動が妨げられ、表現者が才能を十分に発揮できない自国の状況の問題が提起されていた。

勃発から 60 年近く経つザンジバル革命は、このニュースにいまだに影を落としていた。グルナがザンジバル革命をきっかけにイギリスに亡命した難民の作家として賞を受

¹⁶⁾ Profesa Abdurazak Salum Gurnah haandiki utamaduni wa Tanzania au Zanzibar. Msichokisema ni kuwa alifukuzwa kwao na SASA si Mtanzania wala Mzanzibar. Ana uraia wa Uingereza katorokea huko kwa mapinduzi. Kashinda tuzo ndo leo Watanzania ja Wazanzibar wanamng'ang'ania wakati alitorokea UK na familia yake kwa usalama wake. Hiki ni kinaya. Utamaduni anaoandika ni wa UK. Hangeshinda nani angemtambua? Tuache unafiki.

¹⁷⁾ Wanasiasa na viongozi wa Tz bhana... Dah! Wanafiki sana.

¹⁸⁾ (...) Tusubiri muda kina Mhe TUNDU LISU Naye akitunukiwa TUZO YA Amani, cjuu tutakuja kusemaje Kama Ameitangaza Tanzania (...)

けたことを棚に上げてこの受賞を祝うことへの倫理観を問う声が見られたのである。この背後には、革命時のアラブ系住民に対する暴力や迫害についての十分な検証がなされていないだけでなく、強権的姿勢を強める現政権への不満と、現在に至るまでアラブ系への差別と抑圧が続いている状況があるだろう。

一方で、読書習慣の欠如や無知を恥じる声に対し、スワヒリ語作家の名前を挙げる人もいた。イギリスに渡り英語で書くグルナとは違い、タンザニア国内で生まれ育ち、国内の問題を共有している作家に信頼感や親しみ、誇りを抱いていることがうかがえた。ザンジバル革命はスワヒリ語文学においても繰り返し扱われてきた。しかしタンザニア国内でスワヒリ語を用いて書くということは、様々な方面への配慮を強いられることを意味する。まず革命を正当化する政権が与党であり続けている状況で、批判的に革命を描くことは危険を伴う。また、ザンジバルでは現在でも様々な立場の人々が隣り合わせで生活しているため、あからさまな表現で波風を立てることは好まれない。そのためスワヒリ語文学におけるザンジバル革命の描写は、作者の意見は封印してリアリズムに徹したものか、謎めいた表現を取ったものになっているようである。グルナが祖国に寄せる思慕とは裏腹に、タンザニア人にとっては、同じ社会に生き、同じ不自由さや息苦しさの中で表現し続けた作家こそが自分たちの作家であるという思いが少なからずあるのだろう。

今回の受賞がタンザニアの文学界に及ぼす長期的な影響について、今後も観察していきたい。

参考文献

- Brents, Barbara G. & Mshigeni Deo S. 2004. "Terrorism in Context: Race, Religion, Party and Violent Conflict in Zanzibar." *The American Sociologist*, Volume 35, Issue 2: 60-74.
- Burgess, Thomas G. 2009. *Race, Revolution, and the Struggle for Human Rights in Zanzibar: The Memoirs of Ali Sultan Issa and Seif Sharif Hamad*. Ohio, Ohio University Press.
- Chimanda, Leonard. 2018. "Law and Censorship of Artistic Works in Tanzania: The Case of BASATA." *Sanaa Journal*, Volume 3, Issue 1: 13-26.
- Clayton, Anthony. 1981. *The Zanzibar Revolution and its Aftermath*. C. Hurst & Company.

- Gurnah Abdulrazak. 2001. "Fear and Loathing", In *The Guardian Unlimited*, Tuesday, May 22nd.
- Hettiger, Matthew. 2010. "The Racialization of Politics in Revolutionary Zanzibar." Dissertation Thesis, United States Naval Academy.
- Mulokozi, Mugyabuso M. 1975. "Revolution and Reaction in Swahili Poetry." *Kiswahili*, 45 (2): 46-65.
- Petterson, Don. 2002. *Revolution in Zanzibar: An American's Cold War Tale*. New York, Basic Books.
- Shao, Ibrahim Fokas. 1992. *The Political Economy of Land Reform in Zanzibar*. Dar es Salaam, Dar es Salaam University Press.
- Speller, Ian. 2007. "An African Cuba? Britain and the Zanzibar Revolution, 1964." *Journal of Imperial and Commonwealth History*, 35 (2): 1-35.
- Steiner, Tina. 2013. "A Conversation with Abdulrazak Gurnah." *English Studies in Africa*, 56:1, 157-167.

参考ウェブサイト

Aljazeera

<https://www.aljazeera.com/news/2021/10/9/gurnahs-award-stirs-both-celebration-and-contradictions-at-home> (最終閲覧日 2021 年 12 月 22 日)

BBC Swahili 2021/10/15

<https://www.bbc.com/swahili/habari-58922119> (最終閲覧日 2021 年 12 月 22 日)

BBC Swahili 2021/11/8

<https://www.bbc.com/swahili/59203045> (最終閲覧日 2021 年 12 月 22 日)

DW Kiswahili

<https://www.facebook.com/dw.kiswahili/posts/4872698589442096> (最終閲覧日 2021 年 12 月 22 日)

ITV Tanzania

<https://www.facebook.com/itvtz/videos/1614654628926807/> (最終閲覧日 2021 年 12 月 22 日)

James Gayo

<https://www.facebook.com/james.gayo.37/posts/4758916447472697>（最終閲覧日
2021 年 12 月 22 日）

Joseph Mbele

<https://www.facebook.com/joseph.mbele/posts/10208427500601919>（最終閲覧日
2021 年 12 月 22 日）

Mwananchi 2021/10/8

<https://www.facebook.com/MwananchiNews/posts/10159652630369339>（最終閲覧日
2021 年 12 月 22 日）

U.S. Embassy Tanzania 2021/10/7

<https://www.facebook.com/page/137553061928/search/?q=gurnah>（最終閲覧日 2021
年 12 月 22 日）